

「日本語の「声」」
受動文、自発文、敬語文、可能文の分析を通して
牧野成一（まきの・せいいち）

英文法では受動態のことを **Passive Voice** と言いますね。私話のきつげとなつたのは、この **Voice** を日本語で「声」と呼んだらどんなことが分かるだろうか、という思いつきです。

受動文は60年代にチョムスキーの変形文法の理論でしばしば取り上げられた文法です。この講演ではまず受動文の分析から入って行きます。例えば、**John loves Mary** を受動文にするには目的語の **Mary** を主語にして、主語の **John** を **by John** とし、述部の **loves** を **is loved** として、**Mary is loved by John** になると大抵の人は考えていると思います。これは深い意味構造を無視した受動文の引き出し方です。日本語の「メアリーはジョンに愛されている」の受動文も能動文「ジョンはメアリーを愛している」から受動文を出すと、受動文の意味はよく分からないのです。受け身の「声」を発している「メアリー」がはじめから主語に来て、述部に「られている」があり、出来事の内容「ジョンがメアリーを愛している」が文としてはめ込まれ、全体が情意的な意味構造になっています。出来事の述部は必ずしも他動詞とは限りません。自動詞でも問題がありません。ではどんな自動詞でもいいかと言うとそうではありません。ここで新しいことがもう一つ出てきます。それは何かは自然に起こることを示す一群の「自発動詞」は受動文では使えないのです。つまり、受動の声はある出来事が自然に起きて、それに対して「ああ、よかった!」、「ああ、うれしい!」、「ああ、嫌だ!」、「ああ、かわいそうだ!」といったさまざまな程度の感情表現を表します。(例外はありますが、それについても説明を加えます。)私の話の後半部分では、古代日本語から続いている典型的な自発文以外に、敬語や可能文がどうして受け身の声で使われている「(ら)れる」が使われているのかという問題を統一的に取り上げます。日本語には勿論能動の声を表す表現はたくさんありますが、自発的なパトス表現(感情表現)が多いと思います。英語は日本語と異なり、受動の声がないわけではありませんが、それを使うことをためらう心理が強く、日常会話でも能動の声が圧倒的に強いという印象があります。

日本語教育でもさまざまな文法を統括的に説明し、文型を教えることが大事ではないでしょうか。